現代人の自己家畜化について

ヒトとヒグマの軋轢の根本に現代人の自己家畜化が大きく関わっていると考察し、その前提でいろいろを考えているが、その「自己家畜化」ということに関しては、少しだけ説明がいるように思う。

人間本位な社会のシステムの中だけで通用するような変化を野生動物に対して施すことは、総じて「家畜化」と表現されているが、文化人類学の立場において「最も家畜化された動物はヒトである」という考えがある。人類学というのは生物学の一種で、「ヒトという特異な生物が、なぜ、どのように誕生し、どのような生物学的特徴を持った存在であるのかを、科学的に明らかにしようとする学問」（東京大学理学部生物学科 https://www.BS. s.u-tokyo.A.C. JP/～jinrui/anthropology.html）という定義で考えてもらってかまわないと思うが、あくまで自然科学のスタンスを持つ学問である。ヒグマ学も人類学もともに科学的思考でなされているため、私の「ヒトとクマの共生」も、底流的には科学的なスタンスにあることになる。

日本で家畜というと、どうもブタやウシなど畜産動物を思い起こすようで悪い印象を与えかねないが、ペットであるイヌやネコも家畜に含まれ、そちらと比較することで少しは穏やかな論調になるかも知れない。実際、オオカミからイヌへの家畜化は、ヒトが自らに施してきた自己家畜化と多くの点で類似し、ヒトの家畜化は「イヌ化」と表現してもさほど間違っていない。

いずれにしても、ブタやウシ、イヌやネコは、人間本位な欲求で、ヒトがヒトの社会に好ましく利用するために野生動物に手を加えつくり出した家畜という現実や実質がある。

特異な存在として変異的な進化を遂げたヒトとはいえ、地球上に生存し、その地球のエコシステム（生態系）をなす自然環境や野生動物と調和を保ちながら存在していかなければならない現実もある。私の「ヒトとクマの共生」というのは、一方でクマへの理解を深め一定のコミュニケーションで制御をできるようになりつつ、他方で、特に現代の人類の特性・特異性を理解し、双方の歩み寄りによって調和のバランスをとるという基本概念で成り立っている。

人類における自己家畜化について、少しだけわかりやすく掘り下げてみよう。

近代以降のヒトの社会は、言語・文明技術・制度が高度に発達し、 逆に言えばそれに依存しヒトは暮らしている。その依存度は、現代になってさらに高まりつつ、物質文明とか情報化社会とか訴訟国家とか人工知能とかの名の元で様々な形の洗練を成し遂げてきた。

学生時代に若き私がアラスカに飛び込んで行った理由は、そのあたりに対する疑念からだが、そのアラスカの原野での暮らしの影響で、私自身は野生動物や自然との調和の方法をそれこそ自然に体得しつつ、その現代社会を外部から客観的に見るスタンスを名実ともに与えられたと思う。その点では、アラスカにおける野生動物との共生の実践は科学的な文化人類学者と同じ視点にあり、共感を持ちつつ、その考えがすんなりと腑に落ちる。

例えば、ある人が郊外に別荘地を買ったとする。その土地は境界とともに登記簿に記載され、その人の所有物になる。その人が、その土地に別荘を建てて週末に利用しようが、永住しようが、はたまた藪だらけにして放置しようが、法的な制度によって所有権は保障され、他者はそれを侵すことができない。それが法という制度を笠に着た家畜化した「所有・占有」の概念で、いわゆる「縄張り・テリトリー」という概念に通じ、縄の代わりに測量で得られた登記簿上の境界線が機能する。が、その縄と制度に守られた「所有・占有」が唯一のシステムだと思い込んで疑わず、それにただひたすら依存する。

またあるいは、ある男女が結婚したとする。それは、婚姻制度というやはり方便としての制度上のことだが、その制度にあぐらをかいて本質的なほうの努力を怠っていれば、実質的な結婚の意味が失われ、制度上の権利や義務だけが残った関係や暮らしが延々続くだけで、要するに、婚姻制度が完全に形骸化しつつ無意味に存在するだけの状態になる。まあ、「釣った魚にエサはやらない」という昔からの言葉そのままのことが、制度に守られて公然とおこなわれうる世界だ。現代において、離婚やいわゆる不倫が増えているのは、自己家畜化の観点からすれば半ば必然的なことで、恐らく今後も、自己家畜化の流れが止まらなければ、離婚や不倫が増える流れも解消することはないだろう。

では、上述の二つの例で私が言う「本質・実質」というのはどこにどのように在るのだろう？
それを悟るカギは、ヒト同様社会的な高知能動物であるオオカミに見ることができる。

オオカミはテリトリアルな動物で、通常、それぞれのパック（群れ）が一定のテリトリーを持つ。ところが、その土地を占有できる保証を与える制度がないので、誇示や威圧としてのハウリング・マーキング・パトロールを駆使しながら、それを無視して他パックがテリトリーに侵入しようとした場合は、威嚇によってその他パックを遠ざける。
誇示・威圧・威嚇によってそれが可能な根本には、「実力」というのがあって、実力を持たないオオカミのパックは、他パックを押し返せず、結果的にそのテリトリーを維持できない。そのため、オオカミには太古の昔からパックが優秀なアルファを得るメカニズムが働いていて、単に大柄で喧嘩が強いなどということではなく、もっと別の要素がオオカミを進化させてきた。その要素は、ヒトでいう人格のようなものだが、優秀なアルファを持ったパックは、極めて高度に統率され、狩りを余裕でこなしながら、テリトリーを確実に維持することができる。

またあるいは、メイティング（結婚）のほうは、原則的にオオカミは一夫一婦制で、パックにおいてはオスメスのアルファ同士が繁殖行動をとることができるが、特にパックをつくらない北方圏のオオカミがわかりやすく、一度つがいになると二頭のオスメスは生涯添い遂げる。離婚も不倫もないわけだが、これもまた制度によって支えられていることではなく、内発的に湧いてくる感情・本能でつながり、助け合い、子育てをおこない、分け合って成立しているわけだ。もし仮にこの内発的な感情なり本能を「愛」と呼ぶならば、ヒトの結婚は制度によって支えられ、オオカミの場合は愛によって支えられている、ということもできる。

言語・文明技術・制度というのは、ツールであり方便であって、本質はそこにはない。実力や努力や愛に行動原理の本質がある。というのが、オオカミの世界を支配している掟で、まあ、私の考えでもある。

オオカミに見るハウリングやマーキングやパトロールの威圧や誇示、他パックが接近した場合の威嚇は、ひとことで言うと他者との「コミュニケーション」で、単なる言語という狭い範疇ではなく、様々な形のランゲージとして、じつは非常に繊細なレベルでおこなわれている。お互いに微妙な何かを相手に感じ取り、やりとりをおこなってバランスをとっているわけだが、その感覚の繊細さやコミュニケーションの巧みさは、現代人のレベルを遙かに上回るものだ。逆に言うと、現代人は言語というツールに依存するあまり、本質的な相手感知の感覚をスポイルさせてしまっている。

言葉や技術を巧みに使いこなし、制度に従っていさえすればつつがなく有利に生きられる社会。それがいってしまえば現代社会であって、そこにはオオカミがあたりまえに駆使している感覚や意識やランゲージや努力や愛は必要ない。必要ないから延々退化する。そういうスパイラルに陥っていると思われる。

同じく家畜化が進んだイヌやネコを含めた人間社会だけで考えれば、まあそれもいいのかも知れないが、先述したように人間社会も地球上にあって、その地球は数多の生き物が織りなすエコシステムによって回っている。人間社会というのはそれなりに合理的にできているとは思うが、閉じた社会ではない。クマとの間にも、彼らと同じレベルの感覚やランゲージを駆使して一定のコミュニケーションをとらなければ、ヒトの存在する周辺が軋轢や悶着のるつぼと化すのは至極あたりまえのことなのだ。それは、いくら制度や技術に細々と手を加えたところで根本的な解決にはならない。

同じくテリトリアルな性質があるヒトとオオカミだが、それぞれのテリトリーを成立させるメカニズムが根本的に異なる。そして、互いに感じ取り、やりとりをおこなってバランスをとるコミュニケーション能力において、ヒトの側が明らかに低下させ機能させられない現状がある。にもかかわらず、銃器という高性能な殺傷のツールだけは文明という共有物として持っている。誇示・威圧・威嚇などのコミュニケーション不在のまま、自己本位な問題解決をめざし、いきなり「攻撃・排除」を持ち出すところが、ヒトというのを、攻撃性が極めて高く傲慢な異常動物に思わせているところもあるが、捕獲・捕殺・殺処分の前に、正常な動物としてやらねばならないことはまだ残されている。

ヒグマに対して、オオカミの誇示・威圧・威嚇にあたるコミュニケーションが何なのか。もしヒトがそれをヒグマに対してやるならば、どういう具象化があるのか。それを本気で探さねばならない。

クマの世界に投身するとき、「クマの問題はヒトの問題」と私は学んだが、自己家畜化の問題は、自然や野生動物と調和のバランスをとる「共生」の意味で重要なばかりではなく、人類がこの地球の上でどう生きていくかという、ヒトの問題としても極めて重要なことがらと思われる。